

宮崎公立大学学生における情報リテラシーの経年調査

A Study on the Information Literacy of Miyazaki Municipal University Students

井 田 志 乃

宮崎公立大学における初年次学生の情報リテラシーの実態を調査するために、2016年度より科目「情報リテラシー」の受講者を対象にアンケート調査を実施している。2018年度から2022年度の調査結果から、個人情報端末やSNSの利用傾向は日本国内の傾向と同様であることがわかった。SNS利用時のプライバシーへの意識については、画像にうつっている人物への配慮を実践している受講生の割合が高くなっていることが確認できたものの、情報セキュリティ対策については平均実施項目数が減少していた。さらに、インターネット接続機器としてのパソコンの利用率の上昇やタッチタイピングのできる受講生の割合が高くなっていることからパソコンの利用スキルは向上している可能性が高い一方で、プログラミングやネットワーク設定など自分自身で手を動かす経験をしたことがある受講生の割合は2016年度及び2017年度と変わらず全体的に低い傾向にあった。依然として、情報セキュリティに関する継続的な教育や情報技術を利用して機器の設定や創造活動をおこなう教育機会の提供が必要ではないかということが示唆された。

キーワード：情報リテラシー， ネットワークリテラシー， メディアリテラシー， コンピュータリテラシー， 経年調査

目 次

- I はじめに
- II 2018年度以降の科目「情報リテラシー」の概要
- III 調査対象と方法
- IV 調査結果
 - 1 調査項目と有効回答数
 - 2 情報社会全般に関する設問
 - 3 ネットワークリテラシーに関する設問
 - 4 メディアリテラシーに関する設問
 - 5 コンピュータリテラシーに関する設問
- V おわりに

I はじめに

宮崎公立大学（以下「本学」と略す）人文学部国際文化学科で開講している科目「情報リテラシー」において授業内容と関連したアンケート調査を2016年度より継続して実施している。井田（2019）で述べられているように調査対象である本学の科目「情報リテラシー」受講生は、高等学校において普通教科「情報」が必修科目となった平成15年度の学習指導要領に従って情報に関する知識や技術を習得している可能性が高い。令和7年度より新しい高等学校学習指導要領に基づいた情報教育を受けた学生が入学してくることを想定して、現在の大学生の情報リテラシーの現状を把握しておくことは今後の情報リテラシー教育のあり方を検討する上でも有用であると考えられる。

本研究では、井田（2019）の調査を踏まえて、本学における科目「情報リテラシー」の受講生を対象に2018年度から2022年度におこなった調査の経年の変化について確認し、今後の情報リテラシー教育の検討材料とすることを目的とする。

II 2018年度以降の科目「情報リテラシー」の概要

井田（2019）で述べられているように、本学では、2014年度よりメディア・コミュニケーション専攻の専門基礎科目として「情報リテラシー」を開講している。標準履修年次は1年次、開講時期は後期で15回の講義を実施している。2017年度までは必修科目だったが、本研究の調査期間である2018年度以降は選択必修科目となった。参考とした情報リテラシーの定義、及び、授業方針については、井田（2019）と同様である。

テキストとして、2018年度及び2019年度は、山川ら（2013）の『情報リテラシー（第3版）メディアを手中におさめる基礎能力』、2020年度は、岡田ら（2019）の『情報基礎 ネットワーク社会における情報活用と技術』、2021年度及び2022年度は、情報処理学会一般情報教育委員会（2020）の『IT Text（一般教育シリーズ）一般情報教育』を採用し、テキストの内容を15回に分割し講義を実施した。各回のテーマを表1に示す。井田（2019）と同様に理解を深めるための補足情報については、他の論文や書籍より資料を作成し配布した。

2018年度及び2019年度は、2017年度以前同様に講義室において対面形式で授業を実施した。2020年度から2022年度の授業は、COVID-19の影響によりオンデマンド型授業として実施した（表1）。各授業回のために2本から3本の授業動画を作成し、Moodleに掲載し受講生に視聴してもらった。井田（2022）で述べられているように、授業コンテンツは時間割通りの曜日及び時間に公開した上で出席確認のために期日を設け、授業動画視聴、授業内容を理解しているか否かを確認するための小テスト、及び、講義内容に関連した授業内アンケート及びリアクションペーパーとしての授業後アンケートへの回答を促した。テキスト以外の補足資料は、対面型授業ではA3

宮崎公立大学学生における情報リテラシーの経年調査（井田志乃）

サイズの用紙に印刷したものを配布し、オンデマンド型授業では PDF ファイルとして Moodle に掲載し適宜受講生自身にダウンロードして確認してもらう形式とした。

表1 科目「情報リテラシー」各回のテーマ

実施年度	2018年度及び2019年度		2020年度		2021年度及び2022年度	
授業形態	対面		オンデマンド		オンデマンド	
授業内容	第1回	オリエンテーション 情報リテラシーとは	オリエンテーション 情報リテラシーとは 情報の概念 (1)	情報リテラシーとは 情報の収集・整理	オリエンテーション 情報リテラシーとは 情報とコミュニケーション (1)	情報リテラシーとは 情報とコミュニケーション (1)
	第2回	情報社会(1)	情報の概念 (2)	情報の収集・整理	情報とコミュニケーション (2)	情報とコミュニケーション (2)
	第3回	情報社会(2)	情報の加工・表現		情報倫理 (1)	情報倫理 (1)
	第4回	インターネット(1)	情報の発信・交換と評価		情報倫理 (2)	情報倫理 (2)
	第5回	インターネット(2)	情報の管理とセキュリティ		社会と情報システム	社会と情報システム
	第6回	ネットワークリテラシー(1)	問題解決の方法とデータ		情報ネットワーク (1)	情報ネットワーク (1)
	第7回	ネットワークリテラシー(2)	情報のデジタル表現と処理		情報ネットワーク (2)	情報ネットワーク (2)
	第8回	メディアリテラシー(1)	コンピュータのしくみ		情報セキュリティ (1)	情報セキュリティ (1)
	第9回	メディアリテラシー(2)	プログラミング		情報セキュリティ (2)	情報セキュリティ (2)
	第10回	情報とコンピュータ(1)	情報通信ネットワーク		情報のデジタル化	情報のデジタル化
	第11回	情報とコンピュータ(2)	セキュリティを守る技術		コンピューティングの要素と構成	コンピューティングの要素と構成
	第12回	パソコンのしくみ(1)	情報伝達の多様化と社会の変化		アルゴリズムとプログラミング	アルゴリズムとプログラミング
	第13回	パソコンのしくみ(2)	情報社会の進展		データベースとデータモデリング	データベースとデータモデリング
	第14回	パソコンを動かす	情報社会のもたらす影響と課題		モデル化とシミュレーション	モデル化とシミュレーション
	第15回	ネットワークにつなぐ	情報社会における個人の役割と責任		データ科学と人工知能	データ科学と人工知能

III 調査対象と方法

井田（2019）と同様に講義内容に関連したアンケート調査を「情報リテラシー」の講義時間内に実施した。設問の呈示及び回答にはオンラインフォームを使用した。各授業回の設問項目は、井田（2019）と同様に単一選択もしくは複数選択の項目を1, 2問設定し、可能な限り直感的に回答できる形式とした。また設問内容は、アンケート実施時の講義内容と関連しているため、情報社会全般、ネットワークリテラシー、メディアリテラシー及びコンピュタリテラシーの何れかについて問う項目となっている。回答の際に氏名の記入は不要としたが、重複回答排除と本研究における集計対象の抽出のための情報として学籍番号を記入してもらった。

2018年度及び2019年度は、井田（2019）と同様に講義室内のスクリーン及びディスプレイに当該アンケート用 Web ページの URL 情報を QR コードで表示し、受講生の私物であるスマートフォンにて QR コードを撮影して情報を取得し、アンケート用 Web ページへ遷移し回答してもらった。スマートフォンの所有状況については、第1回目の講義にて質問紙によるアンケート調査を実施し、受講生全員がスマートフォンまたは QR コードを読み取って Web サイトを表示できる機器を所有していることを確認している。

2020年度から2022年度は、授業動画内にアンケート用 Web ページの URL 情報を QR コードで呈示するとともに、同じ URL を Moodle にも掲載し、何れかのリンクから当該アンケート用

Web ページへ遷移して回答してもらった。受講生が複数の回答を送信することがないように、オンラインフォームにおいて同一の学籍番号の入力はできない設定とした。

履修登録者数は、2018年度は174名、2019年度は150名、2020年度は144名、2021年度は151名、2022年度は168名だった。

IV 調査結果

1 調査内容と有効回答数

2018年度から2022年度に実施したアンケート調査の設問及び有効回答数を表2に示す。調査をおこなっていない場合は、有効回答数を空欄としている。集計に用いる回答は、井田（2019）と同様にアンケート調査実施年度に入学した学生の回答に限定した。有効回答の抽出にあたっては、アンケート回答時に取得した学籍番号を参照した。また、回答者は対面型授業の場合は出席者のみ、オンデマンド型授業の場合は期限までに回答した受講生のみ限定されるため、有効回答数はアンケート実施回毎に異なり一定ではない。

表2 アンケート調査の設問と有効回答数

カテゴリ	設問	有効回答数 (n)				
		2018年度	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
情報社会全般	あなたが使用しているスマートフォン端末のOSを選択してください。	155	134	130	107	125
	選択肢のSNSで、あなたがアカウントを持っているものを選択してください。(いくつでも可)	144	113	108	92	124
	選択肢の電子マネー・ICカードで、あなたが持っているものを選択してください。(いくつでも可)	139	114	110	101	121
	QRコード・バーコードでの決済を利用したことがあるサービスを選択してください。(いくつでも可)		117	110	101	121
	下記の機器で、あなたがインターネットに接続する際に使用しているものを選択してください。(いくつでも可) ※大学のオンデマンド及びライブの講義以外の場面で使用を想定してください。	126	133	110	95	127
	選択肢のクラウドサービス(オンラインストレージ)で、あなたが利用しているものを選択してください。(いくつでも可)	144	108	108	97	126
	選択肢のテクノストレス予防法で、あなたが実践しているものを選択してください。(いくつでも可)			102	92	112
	選択肢のスマートスピーカーで、あなたが持っているものを選択してください。(いくつでも可)				98	113
ネットワークリテラシー	情報セキュリティ対策として実施しているものを選択してください。(いくつでも可)	134	129	104	92	119
	ソーシャルメディアに人物を撮影した写真をアップロードする際、自分自身がおこなっているものを選択してください。(いくつでも可)	137	117	111	88	121
メディアリテラシー	昨日自分自身が触れたメディアを選択してください。(いくつでも可)	142	124	113	92	124
	自分名義(家族と連名ではなく)で年賀状を出しましたか。			110	97	122
コンピュータリテラシー	パソコンのキーボードでタッチタイピング(ブラインドタッチ)はできますか。	130	125	110	102	128
	スマートフォンのフリック入力はできますか。	130	125	110	102	128
	何らかのプログラミング言語を使ってWebサイトやアプリケーションソフトなどを作成したことがありますか。	141	133	109	89	123
	自宅等で自分自身でLANの設定をしたことがありますか。	147	89	112	95	127

2 情報社会全般に関する設問

(1) 現在使用しているスマートフォンのOS

受講生が科目「情報リテラシー」履修当時に使用していたスマートフォンのOSの種類についての設問に対する回答結果を図1に示す。

宮崎公立大学学生における情報リテラシーの経年調査（井田志乃）

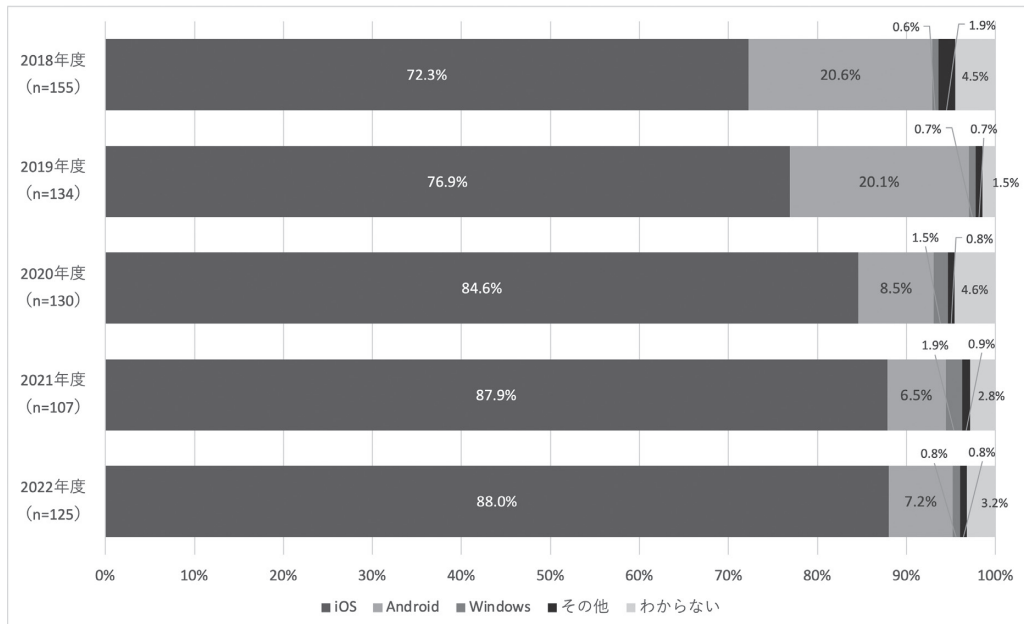
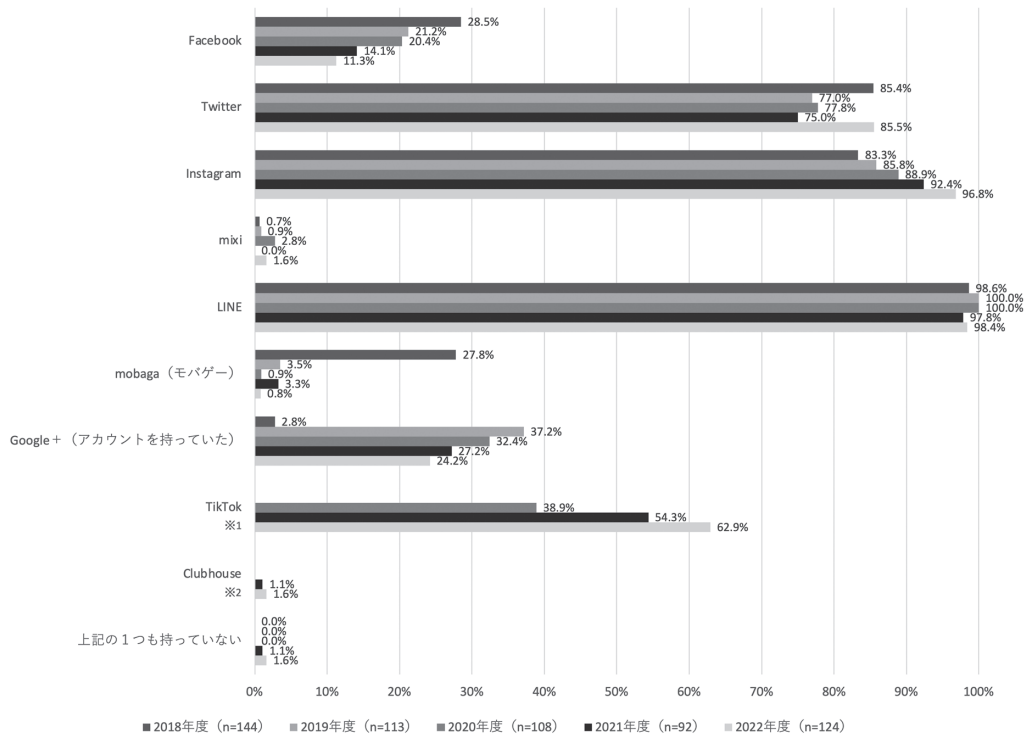


図1 使用しているスマートフォンのOS

使用しているスマートフォンのOSは、何れの年度も70%以上の受講生がiOSであった。さらに、2022年度には90%弱の受講生がApple社製のiPhoneを使用しているという結果となり、アンケート調査を実施した5年間におけるiPhone使用率の増加傾向が確認できた。

(2) SNS (Social Network Service) のアカウント保持状況

受講生におけるSNSのアカウント保持状況についての回答結果を図2に示す。Google+ チーム(2019)によるとGoogle+は2019年4月2日にサービスを終了しているため、2019年度以降の調査においては、過去にアカウントを保持していたかどうかを確認することとした。また、2020年度にはTikTok、2021年度にはClubhouseを選択肢に追加して調査を実施した。



※1 「TikTok」は2020年度より調査項目に追加した。
 ※2 「Clubhouse」は2021年度より調査項目に追加した。

図2 SNSのアカウント保持状況

LINEは、5年間を通して97%以上の受講生がアカウントを保持していた。2019年度及び2020年度には、全受講生がLINEのアカウントを保持していた。また、2018年度まではTwitterのアカウント保持率がInstagramのアカウント保持率を上回っていたが、2019年度に逆転し、2022年度にはInstagramのアカウント保持率はLINEと同程度まで増加している。2020年度より調査を開始したTikTokは、2022年度には60%以上の受講生がアカウントを保持しているという結果となった。

(3) 電子マネー・ICカードの所持状況

講義内容の情報社会におけるRFID利用に関連した電子マネー・ICカード所持状況についての設問への回答結果を図3に示す。

宮崎公立大学学生における情報リテラシーの経年調査（井田志乃）

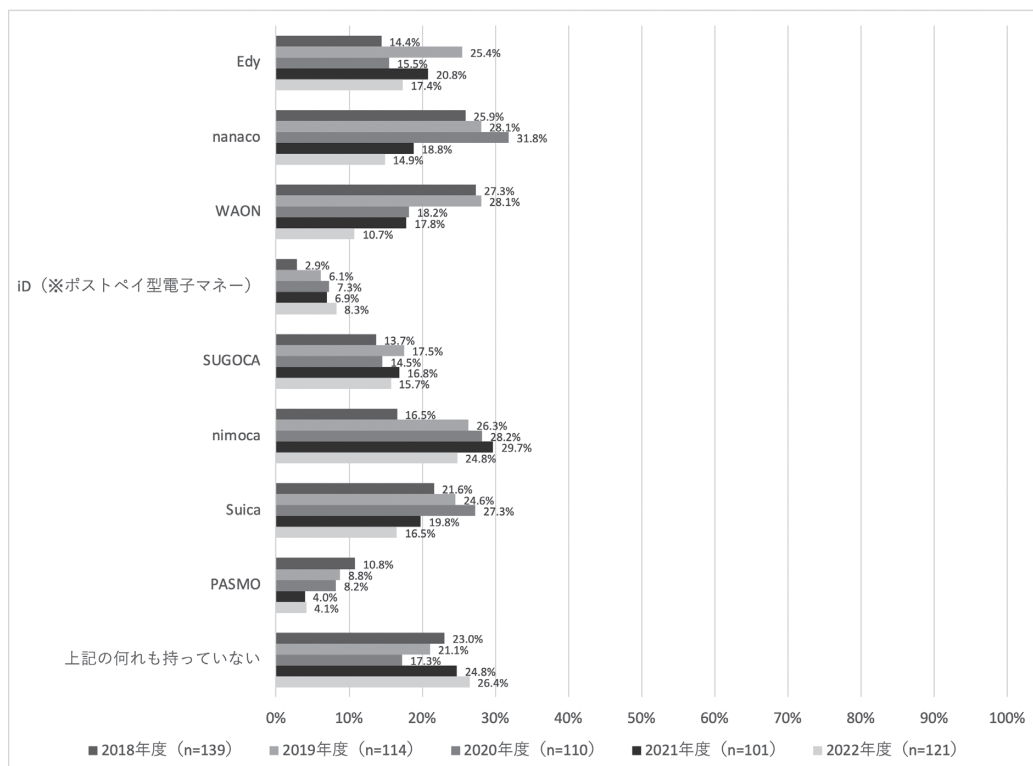


図3 電子マネー・ICカードの所持状況

2020年度まではICカードを所持している受講生は増加傾向だったが、2021年度及び2022年度は何れのICカードも所持していない受講生が20%以上となった。所持率の高い電子マネー・ICカードは、2018年度はWAON、2019年度はWAONとnanacoが同程度、2020年度はnanaco、2021年度及び2022年度はnimocaである。

(4) QRコード・バーコードによる決済経験

電子マネー・ICカード所持状況に関連して、2019年度よりQRコード・バーコードによる決済経験について確認した。回答結果を図4に示す。

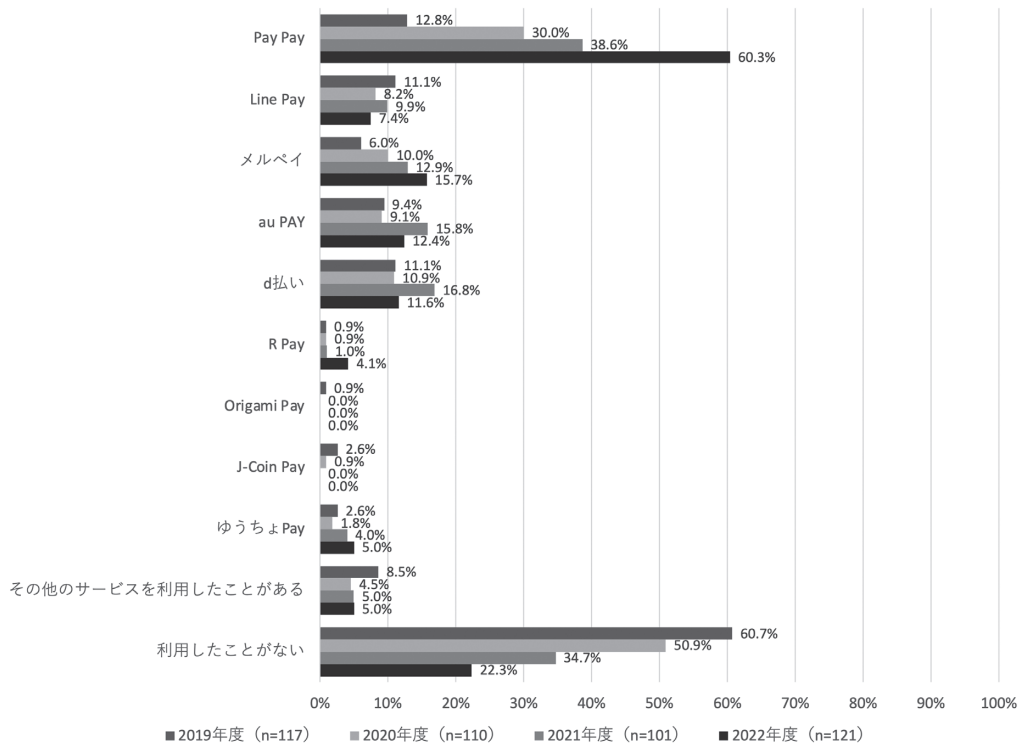


図4 QRコード・バーコードによる決済経験

2019年度はQRコード・バーコードによる決済を利用したことがない受講生が60%以上存在したが、2022年度には20%程度になっておりQRコード・バーコードによる決済経験者が増加傾向であることが確認できた。特に、2022年度はPayPayを利用したことがある受講生の割合が最も高く、60%程度の受講生が利用したことがあると回答している。

(5) インターネット接続に利用する機器

日頃インターネット接続に利用している機器についての設問の回答結果を図5に示す。2020年度、2021年度、及び、2022年度についてはオンデマンド形式で授業を実施したため、大学のオンデマンド及びライブの講義以外の場面での使用を想定して回答するよう設問文に注意事項として追記した。

宮崎公立大学学生における情報リテラシーの経年調査（井田志乃）

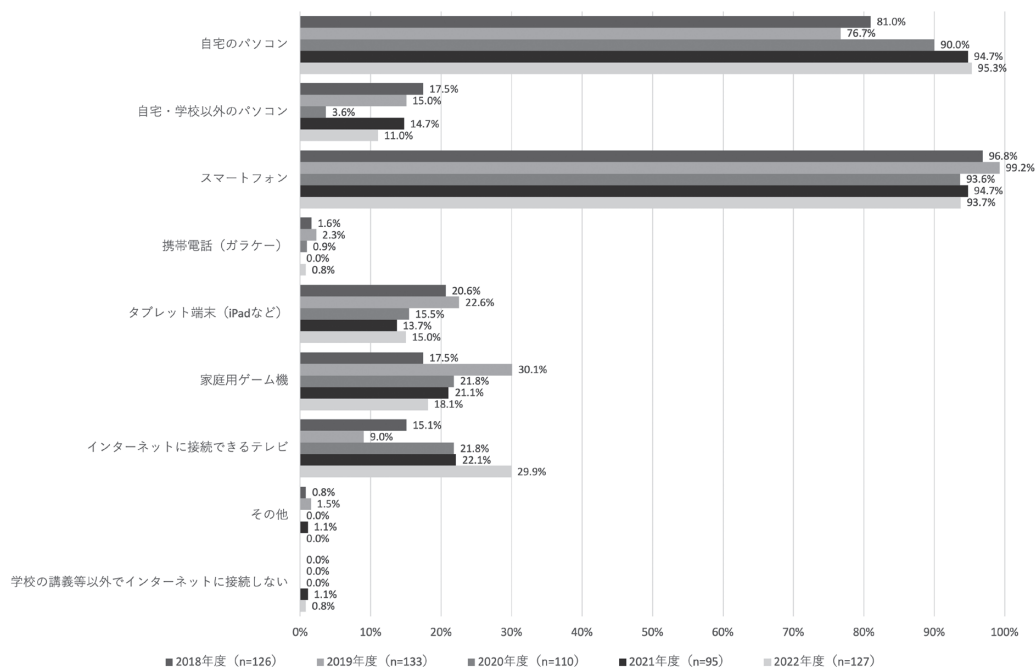


図5 インターネット接続機器

インターネットに接続して利用する機器については、2018年度及び2019年度はパソコンよりもスマートフォンの割合が15%以上高かったが、2020年度以降は同程度の割合となっている。また、2022年度はインターネットに接続するテレビを利用している割合が30%程度まで増加している。

(6) クラウドサービス（オンラインストレージ）使用状況

講義内容でクラウドを取り扱った際に、クラウドサービスの一つとしてのオンラインストレージサービスの利用状況について確認した設問への回答結果を図6に示す。

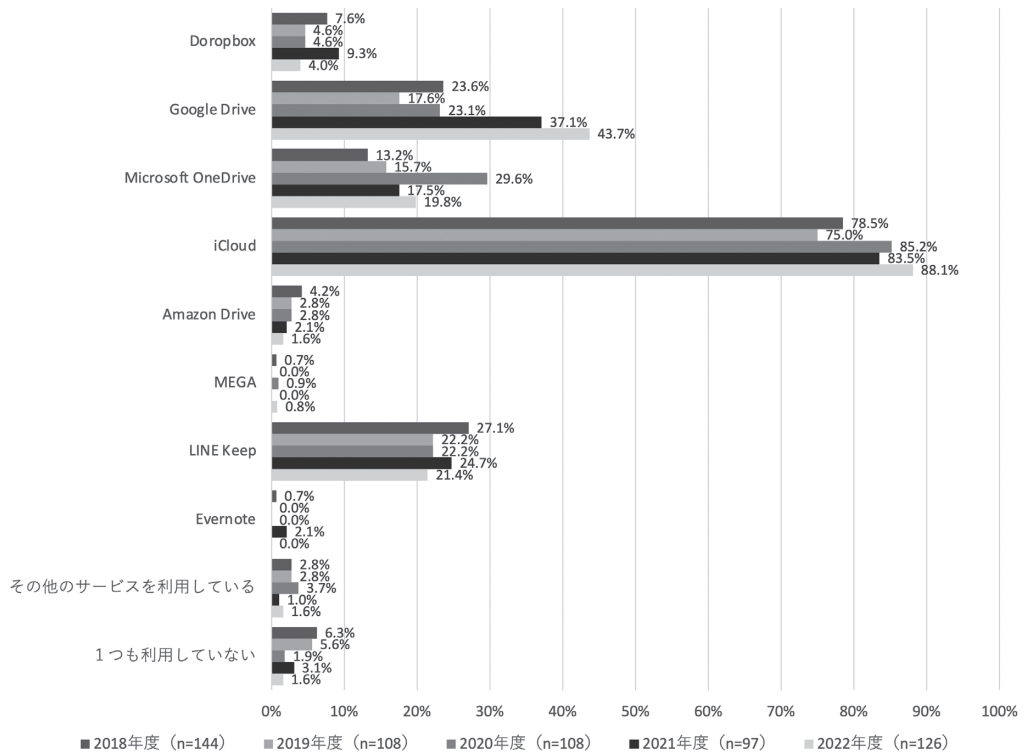


図6 オンラインストレージ使用状況

オンラインストレージのとして iCloud を利用している受講生の割合が何れの年度も最も高いという結果となった。図 1 からわかるように受講生の 7 割以上が Apple 社の iPhone を使用しており、そのため iCloud の使用率も同様の傾向が見受けられる可能性が高い。Dropbox や LINE Keep の利用率は横ばいであるのに対して、Microsoft OneDrive 及び Google Drive は使用率が増加している。オンラインストレージを使用していない受講生は減少しており、2022 年には 2% 程度となった。

(7) テクノストレス予防法の実施状況

情報社会の諸問題の一つとしてテクノストレスやインターネット依存症を取り扱った際に、テクノストレス予防についての意識を確認した。テクノストレス予防法の実施状況への回答結果を図 7 に示す。

宮崎公立大学学生における情報リテラシーの経年調査（井田志乃）

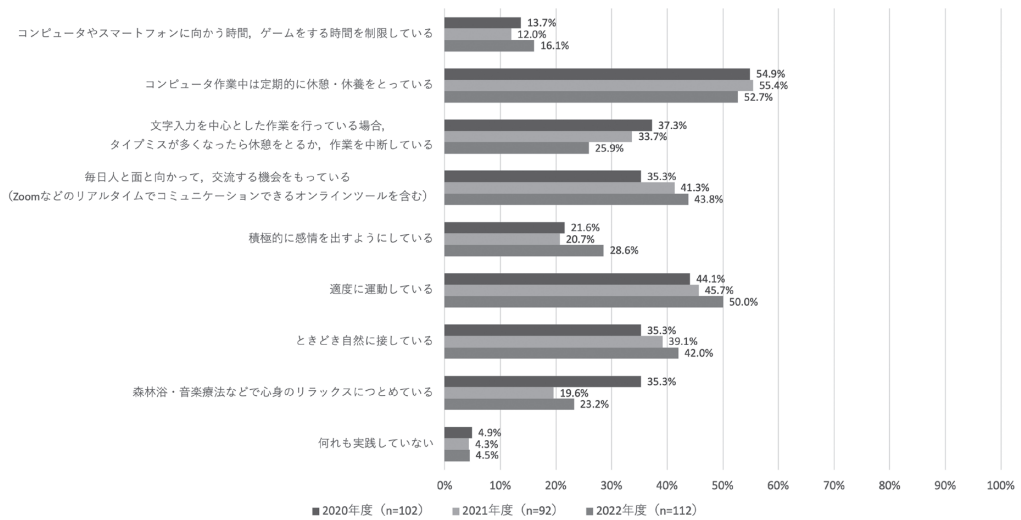


図7 テクノストレス予防法の実施状況

何れの年度の受講生も、約半数が定期的に休憩や休養をとるようにしているという項目を選択していた。また、40%以上の受講生が適度に運動していると回答している。実践している予防法はないと回答した受講生は5%以下となっており、授業での学修前であってもテクノストレス予防につながる行動を実践していることがわかった。

さらに、選択肢として呈示したテクノストレス予防法のうち、実施している項目数の回答割合についても確認した。結果は図8のとおりである。

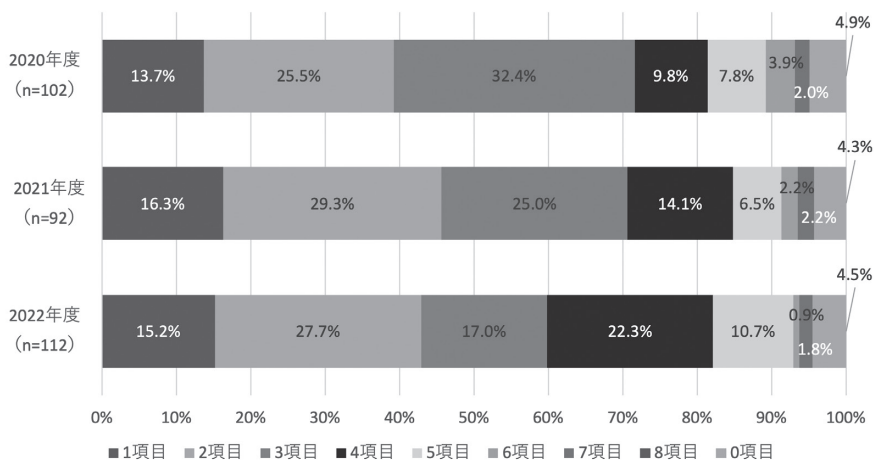


図8 テクノストレス予防法実施項目選択数

2020 年度及び 2021 年度は、2 種類から 3 種類のテクノストレス予防法を実践している受講生の割合が高かったが、2022 年度は 4 種類から 5 種類の予防法を実践している受講生の割合が増加している。何れの年度も 8 種類全ての予防法を実践している受講生はいなかった。

(8) スマートスピーカーの所持状況

2021 年度及び 2022 年度には、人工知能に関連した機器としてスマートスピーカーを取り上げ、その所持状況についても回答を求めた。回答結果を図 9 に示す。

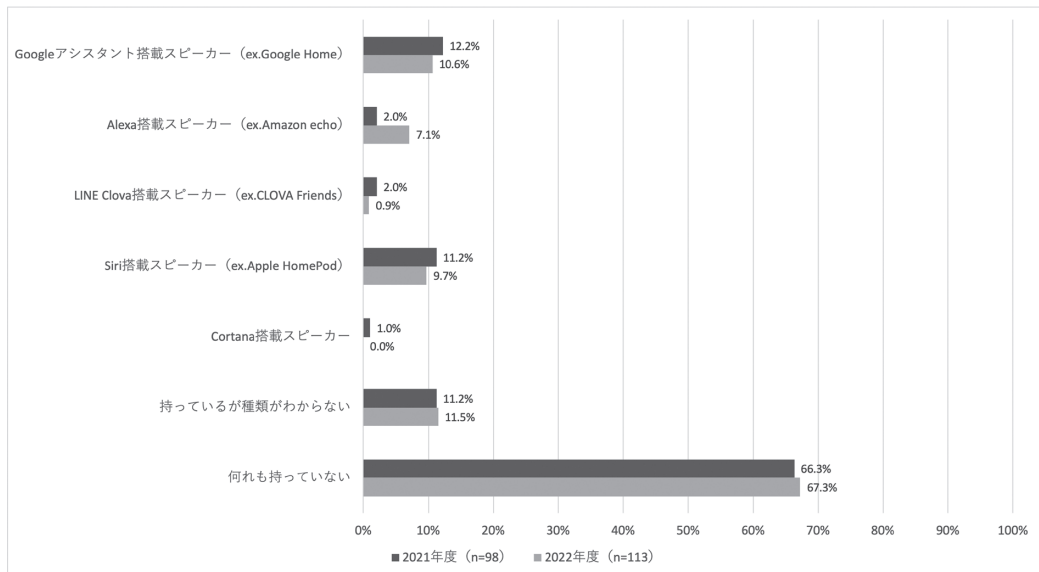


図9 スマートスピーカーの所持状況

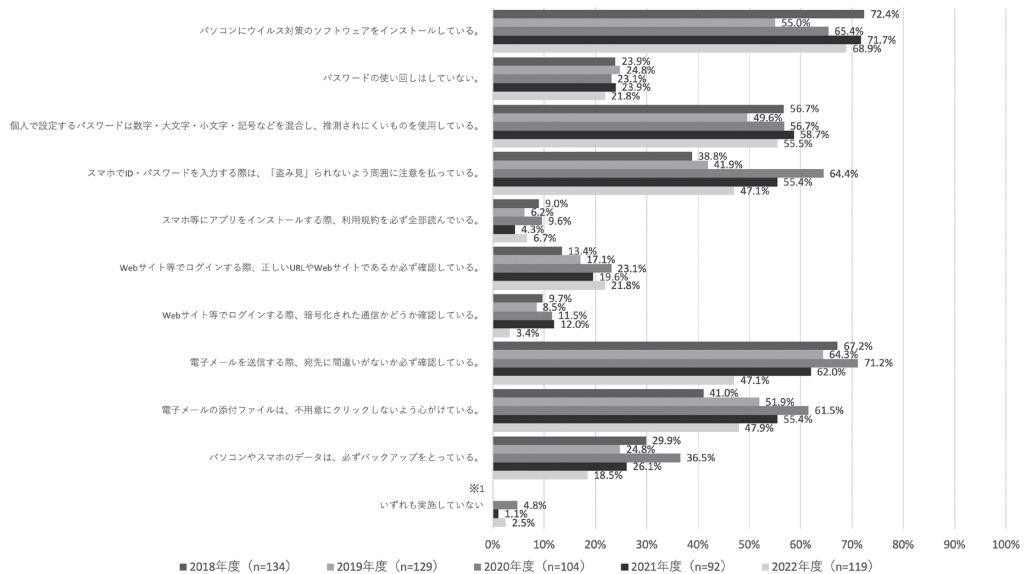
2021 年度も 2022 年度も「何れも持っていない」という回答が 7 割弱と最も多い割合となった。Google アシスタント搭載及び Siri 搭載スピーカーが 10% 程度の所持割合で比較的所持率が高い機器だった。2022 年度には Alexa 搭載スピーカーの所持率が増加しているとともに、「持っているが種類がわからない」と回答した受講生も 1 割程度存在している。

3 ネットワークリテラシーに関する設問

(1) 情報セキュリティ対策状況

情報セキュリティに対する意識を確認した設問への回答結果を図 10 に示す。2020 年度以降の授業では、「いずれも実施していない」という選択肢を追加した。

宮崎公立大学学生における情報リテラシーの経年調査（井田志乃）



※1 「いずれも実施していない」は2020年度より調査項目に追加した。

図 10 情報セキュリティ対策実施状況

さらに、情報セキュリティ対策として実施している項目数の回答割合についても確認した。調査年度によって選択肢が異なるため、2018年度及び2019年度の集計結果を図11、2020年度から2022年度の集計結果を図12に示す。

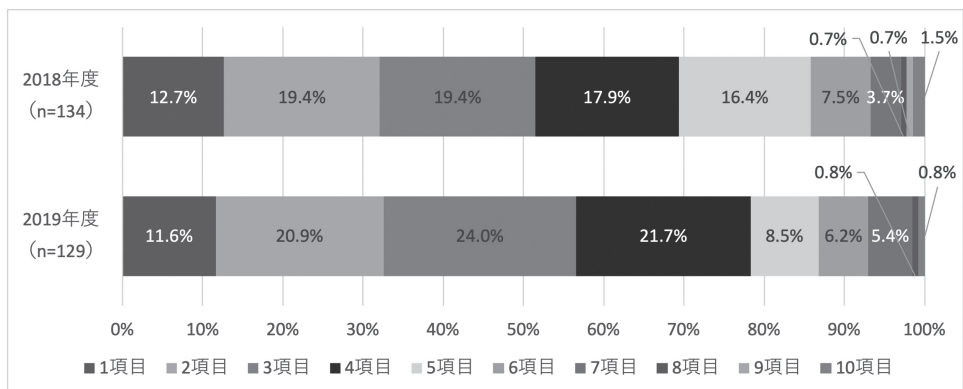


図 11 情報セキュリティ対策実施項目選択数（2018年度，2019年度）

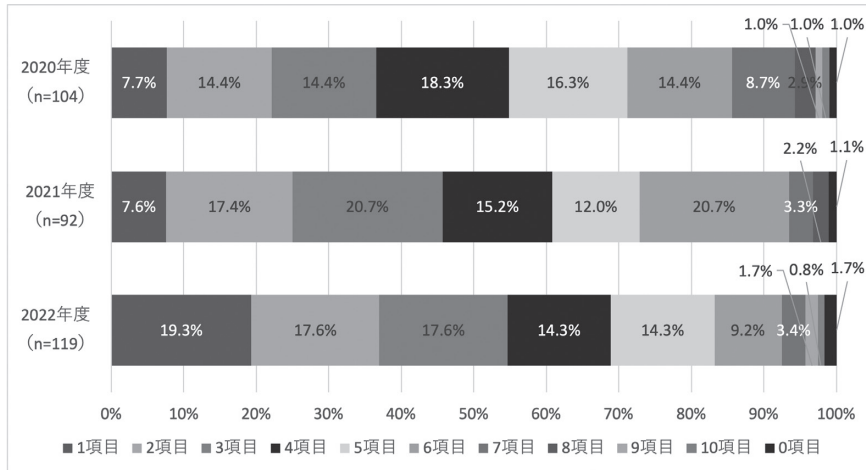


図 12 情報セキュリティ対策実施項目選択数 (2020 年度, 2021 年度, 2022 年度)

2020 年度には 5 項目以上の対策を実施している受講生の割合が最も高かったが、2022 年度には 2016 年度と同程度の割合となった。また、2022 年度には、0 項目及び 1 項目のみ実施している受講生の合計が 20% 程度となり、調査期間において最も高い割合となっている。

(2) SNS への写真アップロードの際の意識

SNS 利用時のマナーと関連して、個人情報やプライバシーへの意識を確認するための設問への回答結果を図 13 に示す。

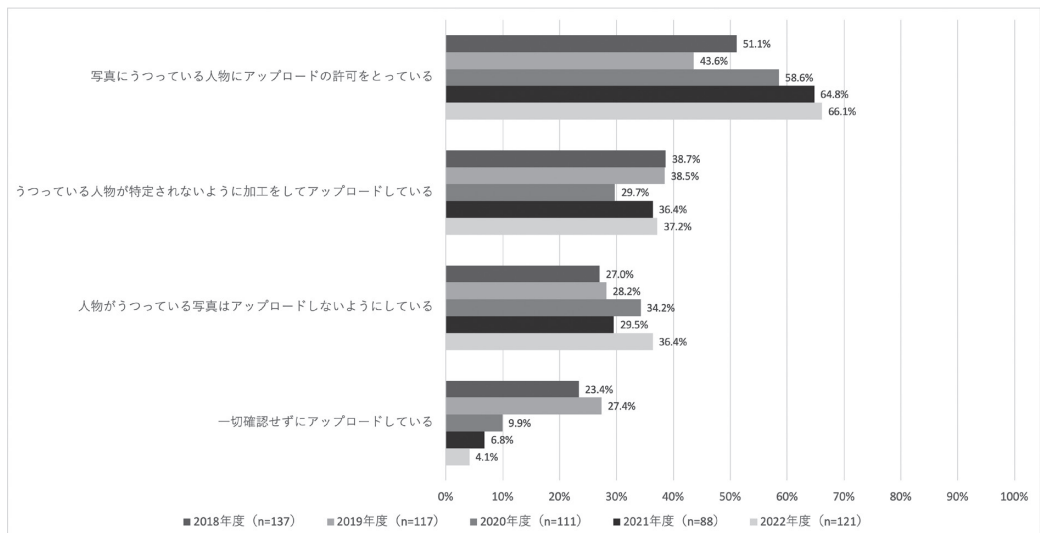


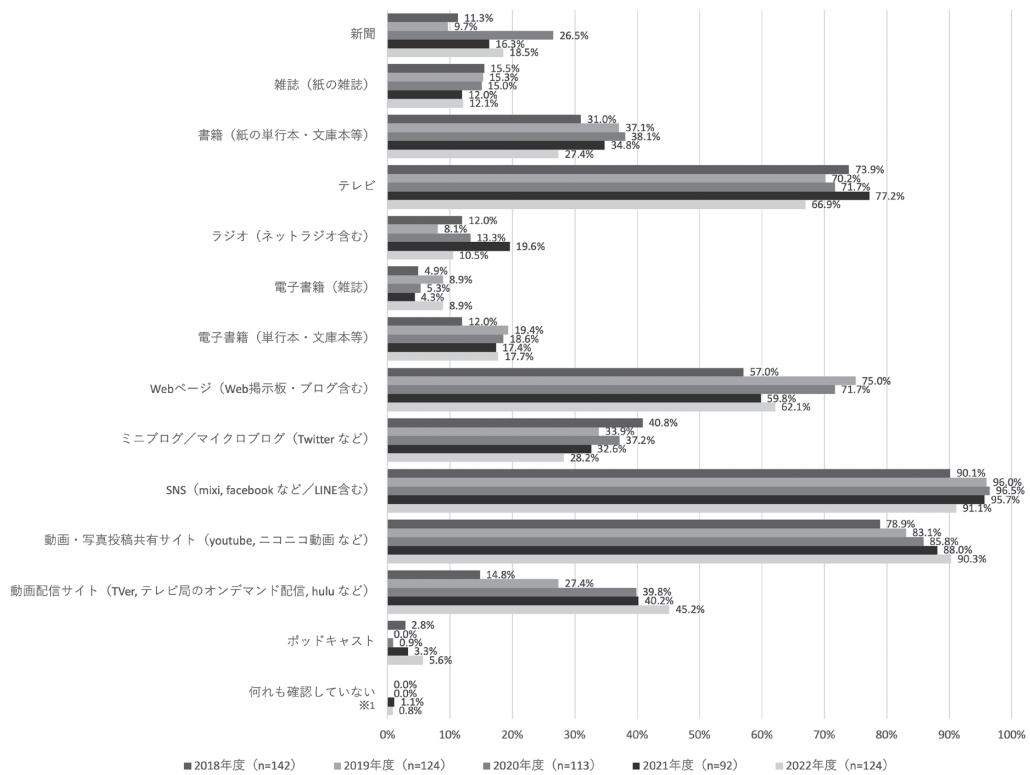
図 13 SNS への写真アップロードの際の意識

2019年度を除いた調査年度においてSNSに画像をアップロードする際にはうつつている人物に許可を取っているという受講生の割合が50%を超過している。2019年度までは一切確認せずに写真をSNSにアップロードしている受講生が20%以上確認されたものの、2020年度以降は10%未滿となり減少傾向であることがわかった。

4 メディアリテラシーに関する設問

(1) 日常的に確認しているメディアの種類

メディアリテラシーの定義や重要性を学修する講義内容に関連して、調査に回答した前日に利用したメディアについて確認した結果を図14に示す。なお、2019年度より「何れも確認していない」という選択肢を追加した。



※1 「何れも確認していない」は2019年度より調査項目に追加した。

図14 調査日の前日に利用したメディアの状況

SNSを確認した割合が最も高いという結果は、井田（2019）と同様である。一方、動画・写真投稿共有サイト及び動画配信サイトの利用率が年々高くなっており、特にテレビ局などのオンデマンド配信等を含む動画配信サイトの利用状況は、井田（2019）の15%程度と比較すると2022年度には利用割合が3倍以上となっている。

(2) 年賀状の送付状況

2020年度より比較的身近なオフラインのメディアとして年賀状の送付状況についても確認した。何れの年度においても冬季休業終了直後の授業で調査を実施した。回答結果を図15に示す。

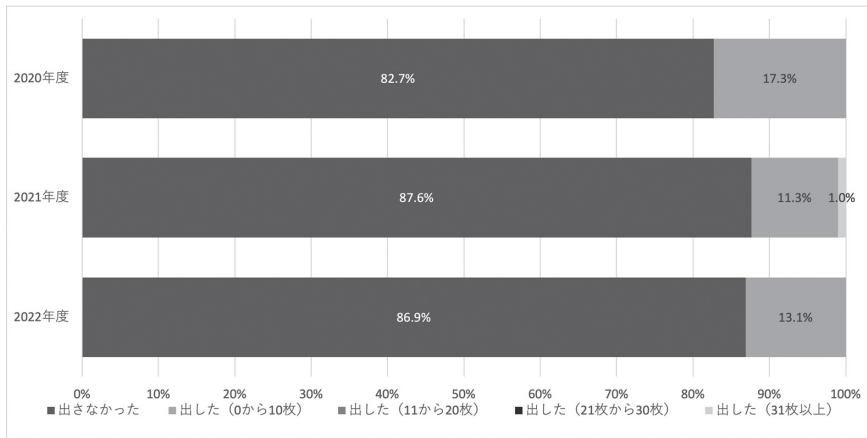


図15 年賀状の送付状況

何れの年度も80%以上の受講生が年賀状を出さなかったとの回答結果だった。2021年度に31枚以上の年賀状を出した受講生がいたものの、何れの年度においても年賀状を出したほとんどの受講生が0枚から10枚という項目を選択していた。

5 コンピュータリテラシーに関する設問

(1) PCのキーボード入力における技術

PCの入出力機器についての講義内容に関連して、パソコン利用時のキーボード入力でのタッチタイピングができるかについても確認した。回答結果は図16のとおりである。

宮崎公立大学学生における情報リテラシーの経年調査（井田志乃）

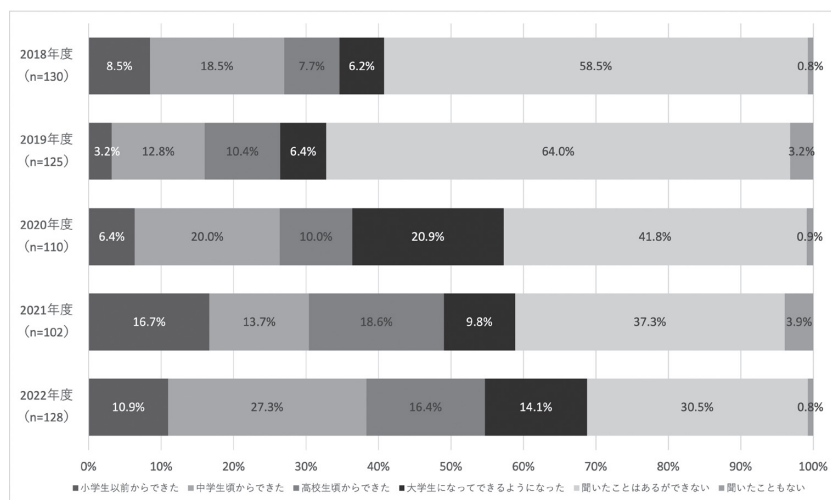


図 16 キーボード入力におけるタッチタイピングの可不可

キーボード入力でのタッチタイピングができる受講生の割合は、2019年度には井田（2019）における2016年度の調査結果と同程度まで低くなっていたものの、2020年度以降は年々高くなっている。2022年度には、68.7%の受講生がタッチタイピングができると回答しており、2016年度の調査開始以降最も高い割合を示した。

(2) スマートフォンの入力における技術

PCのキーボード入力についての設問と合わせて、スマートフォンにおいてフリック入力ができるかを確認した設問への回答結果を図17に示す。

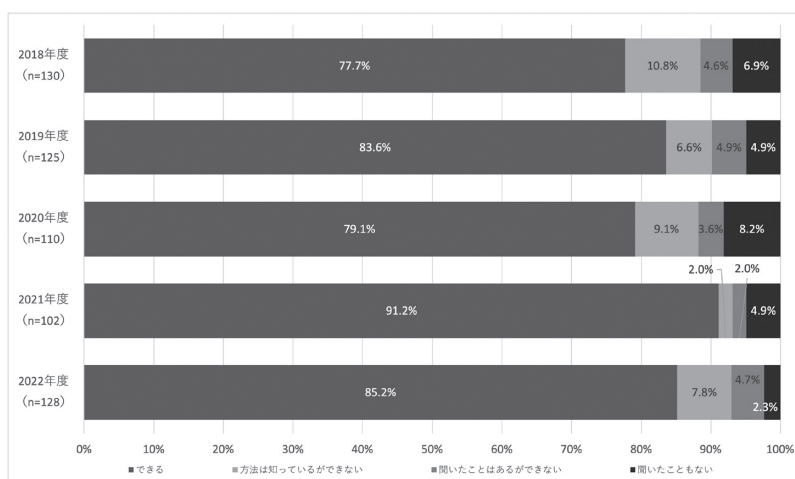


図 17 スマートフォンにおけるフリック入力の可不可

スマートフォンにおけるフリック入力ができる受講生の割合は、井田(2019)では70%前後だったが、2018年度以降は何れの年度も77%を超過、2021年度は90%以上の割合であることがわかった。2022年度には、2021年度よりもフリック入力ができる受講生の割合は5%程度低下しているが、聞いたこともないと回答した受講生の割合は最も低くなっており「フリック入力」という語の認知度が上がっていることがうかがえる。

(3) プログラミング経験

プログラミング言語の歴史や特徴の講義に関連して、受講生にプログラミング経験の有無を確認した。回答結果を図18に示す。

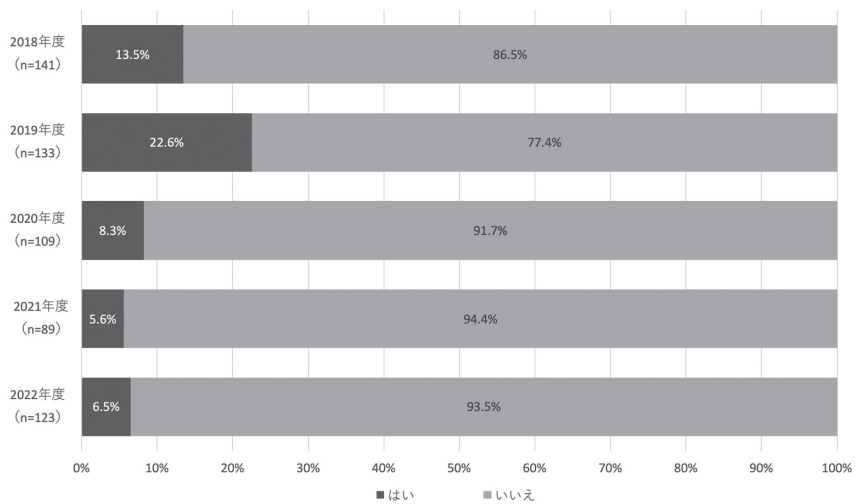


図18 プログラミング経験の有無

プログラミングを経験したことがあると回答した受講生は、2019年度が22.6%と最も高い割合だった。2020年度以降のプログラミング経験者は10%未満となっており、井田(2019)における2017年度の受講生のプログラミング経験者の割合と同程度である。

(4) LAN (Local Area Network) の設定経験

ネットワーク速度や接続機器についての講義内容に関連して、自宅等におけるLANの設定経験を確認した。回答結果を図19に示す。

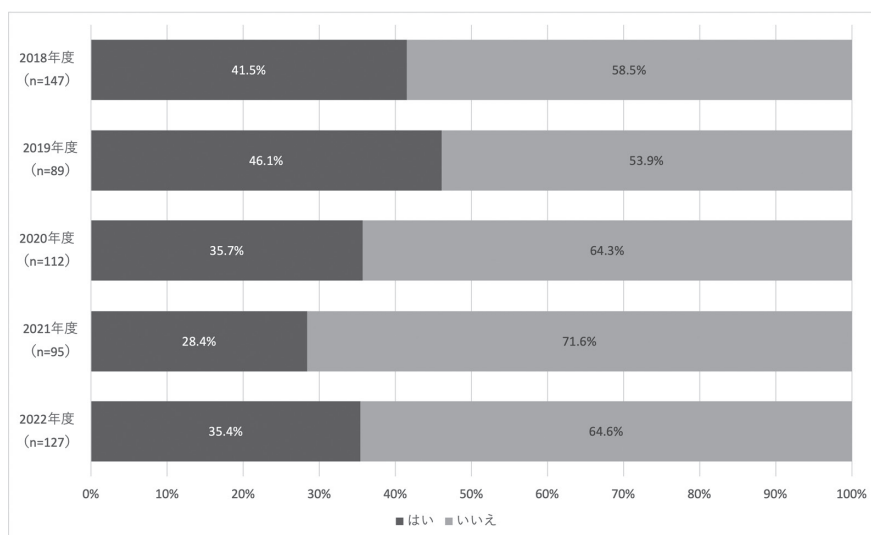


図 19 LAN 設定経験の有無

自分自身での LAN の設定経験がある受講生の割合は何れの年度も 50% 以下だった。LAN の設定経験のある受講生の割合が最も高かったのは 2019 年度で 46.1% であり、2020 年度以降の受講生はオンライン授業への対応等によりインターネット環境の整備が必要だったにも関わらず、LAN 設定経験者は 40% 未満にとどまっている。

V おわりに

本研究では、2018 年度から 2022 年度にかけて本学の科目「情報リテラシー」受講生に対しておこなったアンケート調査結果の経年の変化を確認した。

使用しているスマートフォンの OS の種類については、iOS を使用している割合が年々高くなっており 2022 年度の受講生の 90% 弱が iOS を搭載した iPhone を使用していることがわかった。株式会社 NTT ドコモ モバイル社会研究所（2022）によると、日本国内における iOS の利用率は 46.6% と Android の 53.4% を下回っている。しかし、若者の iOS 比率が高まっている傾向があるとされ、15 歳から 19 歳においては 66.9%、20 歳から 29 歳においては 70.3% という割合となっており、本学においても日本国内における 10 代及び 20 代と同様の傾向が確認された。SNS のアカウント保持状況は、総務省（2023）において日本国内の 10 代は LINE の利用率が 90% を超過、さらに Twitter よりも Instagram の利用率が高いという傾向が報告されており、本学においても同様であることが確認できた。

メディアの利用状況についても総務省（2023）において 10 代及び 20 代はテレビや新聞、ラジオといったメディアよりもネット利用の時間が長いという傾向が示されている。本研究では利用

時間までは調査していないものの、接触したメディアの種類にも同様の傾向があらわれているのではないかと考える。

ネットワークリテラシーとして SNS に写真をアップロードする際に注意している事項について確認したが、人物がうつっている写真について一切確認せずにアップロードしている受講生の割合は低くなっていることがわかった。図2からもわかるように本学でも画像や動画を主なアップロードコンテンツとする Instagram や TikTok のアカウント保持率が高くなり、世間的にはフォトハラスメントという語が存在するほど人物が写っている画像や動画がインターネット上にアップロードする行為に注意が促されている。本科目の受講生においても人物が写っている画像の取り扱いについての意識が高くなっている可能性がある。

コンピュータリテラシーとしては、入力機器の操作スキルとプログラミング経験、LAN の設定経験を確認した。キーボード入力におけるタッチタイピングができる受講生の割合は年々高くなっており、図5でインターネットに接続するために利用している機器として自宅のパソコンと回答した受講生の割合が高くなっていることを踏まえるとパソコン利用スキルが向上している傾向があるのではないかと考えられる。しかし、プログラミング経験及び LAN の設定経験については井田（2019）の調査当時より横ばいであり、依然として自分自身の手を動かしてネットワークを構築したりアプリケーション等を作成したりした経験のある受講生が少ないことが確認できた。さらに、図1及び図9からわかるように自分自身が利用しているスマートフォンの OS の種類がわからない受講生やスマートスピーカーを所持しているものの種類がわからない受講生が毎年度一定数存在し、自分自身が使用している機器への興味や知識獲得意欲について不安が残る結果となった。

情報セキュリティ関連の意識に関しては、1人あたりの情報セキュリティ対策実施項目が減少している点、何の対策もしていない受講生が存在する点については今後の検討事項であると考えられる。井田（2019）でも述べられているように、科目「情報リテラシー」開講年度と同年度の前期に情報セキュリティについての研修を受講していることを考えると、個人差の大きさや危機意識の低さについては看過できない。情報セキュリティや情報モラルについては大学卒業後も継続して考えていかなければならない問題であるため、大学在学中も研修や講義で継続的にフォローしていく必要があると考える。

今後は、令和4年度からの新しい学習指導要領に基づく情報教育を受けている入学者への情報リテラシー教育のあり方を検討することが必要となる。本研究の研究結果を踏まえて、社会人に対するリカレント教育も視野に入れ、情報や情報活用について継続的に学修し、知識だけでなく体験を伴って情報活用能力を習得するための情報リテラシー教育方法について検討していきたい。

参考文献

- [1] Google+ チーム「一般ユーザー向けの Google+ 提供終了について」Google Japan Blog, <https://japan.googleblog.com/2019/02/google.html>, 2019年2月1日更新（2023年10月31日最終閲覧）
- [2] 井田志乃「宮崎公立大学学生における情報リテラシーの現状と課題」『宮崎公立大学人文学部紀要』Vol.26, No.1, pp.1-15, 2019
- [3] 井田志乃「オンデマンド型授業におけるアクセスログ分析」『宮崎公立大学人文学部紀要』Vol.29, No.1, pp.19-37, 2022
- [4] 情報処理学会一般情報教育委員会（編集）『IT Text（一般教育シリーズ）一般情報教育』オーム社, 2020
- [5] 株式会社 NTT ドコモ モバイル社会研究所「iPhone ユーザーの若年化が進行」モバイル社会研究所, <https://www.moba-ken.jp/project/mobile/20221130.html>, 2022年11月30日更新（2023年10月31日最終閲覧）
- [6] 岡田正, 高橋参吉（編著）, 新開純子, 大西淳, 高橋章, 河野清尊, 松野良信, 長岡健一（著）『情報基礎 ネットワーク社会における情報活用と技術』実教出版, 2019
- [7] 総務省「令和4年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書」総務省, https://www.soumu.go.jp/main_content/000887589.pdf, 2023年6月23日更新（2023年10月31日最終閲覧）
- [8] 山川修, 徳野淳子, 田中武之, 菊沢正裕『情報リテラシー（第3版）メディアを手中におさめる基礎能力』森北出版, 2013

